
その門の先にあるモノ

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その門の先にあるモノ

【Nコード】

N6659Z

【作者名】

碧

【あらすじ】

僕は、友達を捨てた

君を忘れ去ろうとした僕は、神の裁きにあう。友を闇へと追いやった僕に神は慈悲の目を向けるのか。

つたない文章で、読みづらと思いますますが是非、読んでください。

プロローグ く裏切りく

僕は、暗闇の中に一人、たたずんでいた。

この暗闇は、僕以外、誰も入ってこないはずだった。

でも、そんな中に入ってきてくれた人がいた。それが君だった。最初僕は君を拒絶した。

この作られた僕だけの暗闇が、きみによって照らされて、僕の恥ずかしい過去がぼれてしまうのではないかと。そして、それを見た君も他の人のように、僕を拒絶するのではないかと。

違っていた。

僕がそれまで、出会ってきたすべての人。両親、教師、友達、その友達の親、それら、すべての人と違っていた。うれしかった。こんな僕を素直に見てくれる人がいたのかと。

そして、僕らは友達になった

それからは、何をするのも一緒にやってきた、ご飯を食べるのも、お風呂に入るのも、外で遊ぶのも。

僕は自分が嫌いだ。僕をあの暗闇から救い出してくれた君を僕は、裏切ったのだ。僕の過去を知らない友達ができて、僕の過去を知るものはもう君しかいなかった。

だから、怖かった！僕の過去をいつか君が、彼らに教えてしまっているのではないかと。そうして、僕は僕を救ってくれた君を、使い終わった道具のように捨て去ることにしたんだ。

君は、僕の元いた暗闇よりも、もっともっと深い闇の中に沈んでしまった。

静かに微笑んで

プロローグ く裏切りく（後書き）

たぶん、厨二がすごいことになっていると思いますが、どんどん読んでいただけたら、うれしいです。

作者は、中三で受験シーズンなので、二月か三月まではあまり投稿できないと思います。

第一話 出会い(前書き)

できればコメント欲しいです!!! (毒舌・中傷なしで)

では、第一話です!

いきなり展開ですが、お願いします。

第一話 出会い

目覚めたら廃墟だった。

そう、廃墟です。幽霊とかがガッツリ出てきそうな廃墟です。

しかも、自分が誰なのか、どうやって暮らしてきたのか、全く分からない。

かろうじて思い出されるのが、自分の名前「夕凧ゆしな椀わん」^{ゆしなわん}という名前と今まで読んできた書物の知識だけ。それ以外のこと、たとえば

ここに来たときの記憶　　を思い出そうとすると、激しい頭痛に襲われる。記憶を思い出すことが無理なのを知るのには、それだけで十分だった。もし、ここが自分の部屋であったのなら、こんな思いをすることもなかっただろう。

記憶を探ることが無理と分かった今、ここにこうしてただ座っているのは、僕の性格には合わない。頭痛の影響で、少しフラツとしながらも、立ち上がる。立ち上がってみて分かったことだが、ここは、ビルで建設中であることが分かった。それというのもこの部屋のいたるところに建築図や、作業服、コーンなどが置いてあるからだ。

奇妙なところも見つかった。それは、窓がないことであり、階段もドアもないことだった。建築図の通りたてられるとするならば、ここは、九階建てビルの七階であるはずだった。七階であるはずのこの階には、階段がない、つまり密室状態。僕がここで、監禁されていたのならまだしも、誰かが僕を連れてくることも、僕がここへ間違っ入ってしまうこともありえないのだ。

ストン。

突然、この不毛なコンクリートの上に何かが、落ちたような音が

した。ソレは、部屋の中央にあった。淡い光なのに、目を離すことのできない光を点滅とともに発するソレ　　扉の形を模したペンダント　　は、無機物であるはずのソレは、まるで生きて脈動して、僕を手招きしているかのような不思議な魅力を持っていた。だが、その魅力的な姿は、むしろ僕にこれ以上ないほどの恐怖を与えた。それは、人に眠る本能的な勘だったかもしれない。だが、それは僕にとっては、何よりの真実だった。

人は、恐怖を感じると、好奇心に駆られる云々。

今の僕が、まさにソレだった。心の底からソレを畏怖しているのは、語るまでもない。心臓の鼓動のように静かにハッキリと点滅する姿は、僕を魅了してやまなかった。ただ、心から恐れているのは、本当だ。恐怖心と好奇心、それら二つが拮抗して僕の心の中に存在していたからこそ、僕は情けなく悲鳴を上げるのでもなく、近寄って行って拾い上げるといふこともしなかった。

突然、そう突然だ。今までの光の点滅が規則正しいチカツ、チカツ、という強い光を発していたとすると不規則な弱い点滅を繰り返し始めたのだ。何が原因かといわれれば、このことを置いて他にはないだろう、あのペンダントを拾い上げてしまった僕の不注意な行動は。ペンダントは、誰が作ったのであろうかとても美しかった。シウルシウルと音を立てて銀色の鎖が地面を離れる。見たところ電池を入れるような場所はないみたいだな、なんて独り言をつぶやきながらペンダントを観察していた。

【我を必要とするのは、汝か？】

壊れたのだと、そう思っていたペンダントは、さつきと同じように強い光を発し始め、僕に話しかけてきた。（この状況じゃ、ソレしか考えられん）　　嵌められたのだ、とそう気づき後悔したがもう遅かった。まさに、後悔先に立たずだった。

【今一度問う、汝は我が必要か？】

ペンダントは先ほどよりも語尾を強め、訊いてきた。どうやら気が短かみだ。ここは、早く答えるべきだろう。それに何か手が打てるかもしれない。

【最後である、汝に我は

「ああ、何とか助けては

【最後まで、話を聞かんか！】

それと、かなり面倒くさい相手らしい。

【フム、まあいい。なるほどな、我が必要であるか。そうかそうか。汝、名はなんと申すのだ】

必要とされるのが相当、うれしらしい。え〜と、名前ね。

「僕の名前は、夕凧ゆっなぎだ、ナギって呼んで欲しいな」

【ナギか・・・。】

「ん？僕のだ名がどうかしたの？」

【い、いや、何でもないのだ。我の名は、マウナル。好きに呼んでくれて構わぬ】

マウナル……。う〜んマウナルかあ、そっだ!!

「よし、ウルって呼ぼう」

【ウ、ウル!？】

「えっ、何かだめだった？」

ペンダントの点滅が急に早くなっていた、どうやら何か思うことがあるらしい。

【ウルか……そうだな、では、ウルと呼んでくれ】

これが僕と不思議なペンダントのウルとの出会いであり、僕の人生の新たな幕開けでもあったのだ。

第一話 出会い（後書き）

こんな感じで書いていくつもりです。どうか、評価と感想をお願いします。少し、辛口でも構いません。では、みなさんお休みなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6659z/>

その門の先にあるモノ

2011年12月29日02時52分発行